

奇跡の転化

成平 一平太

「杏奈さんは？」

くぐり戸を抜けて玄関の扉を開けるなり出迎た夢之助に善次郎が投げかけた。

「ああ、言われた通り、院長の特別許可を取って一晩だけ退院してきた。今、寝室で横になっている」

夢之助の顔が紅潮している。早く入れとばかりに善次郎に手を差し伸べながら、視線がその背後を探る。

善次郎が持ちかけてきた話は胡散臭い話ではあったが藁にでもすがりたい状態がすでに一年近くも続いている夢之助にとって疑うことよりも奇跡を信じたいとの思いが優先していた。何よりも四歳になったばかりの長男、甚之助と年子の彩奈のためにも妻の杏奈には元の躰を取り戻して欲しかった。

「大変残念ではありますがスキルス性の胃癌です。しかも深刻な状態にあります」

「深刻って？」

体の変調を訴える杏奈を気遣い夢之助は検査入院をさせた。その翌日に担当医師から告げられた余命は残される子供たちのことを考えると夢之助には心のつぶれる思いだった。それでも奇跡を信じ化学療法で様子を見ることとなった。

「ママー、はやくげんきになつてね」

夢之助に連れられて甚之助と彩奈が杏奈の病室に見舞いにきた。言い含められているのか幼子の顔が明るい。それでも、病室に入るなり彩奈はベッドに駆け寄り杏奈の顔に手を伸ばし懐かしむかのように甘えた。夢之助はベッドの高さを一番低くし、椅子を寄せて彩奈をその上に立たせた。杏奈は彩奈を優しく抱き寄せ頬ずりをしながら久しぶりに我が子の感触を楽しんでいるかのようにも見える。この先、何度こうして我が子を抱き寄せることができるのだろうと思うと涙が止まらない。

「ママー、これきれいでしょ。幼稚園のお庭から一つもらってきたんだよ」

「ほんと、きれいなガーベラね。ありがとう、甚之助」

杏奈の涙に甚之助にもこみ上げるものが無いはずはない。必死にこらえているのは夢之助にも見てとれた。

「ママー、この赤いお花ね、せんせいにママにあげた

いから一つだけっておねがひしたの。そしたらね、せんせいママはやくよくなるといいねって、きつてくれたの」

「そうなの、本当にありがとう」

「だから、なかないでね。いつものママのえがおがずきなんだから」

「ごめんね。甚之助と彩奈の顔を見たらつい嬉しくなっちゃった。嬉しくても涙がでるのよ。だからほら、もう笑顔でしょ」

夢之助は彩奈の横にもう一つ椅子を並べた。

杏奈は甚之助をも抱き寄せ、あふれる涙を見せまいと何度もパジャマの袖を顔に当てた。

大物俳優の妻である杏奈のことはすでに世間の周知となっていた。入院して間もなく週刊誌の好機の目にさらされた。夢之助はあえてテレビカメラの前に立ち、必死に耐える幼子のためにも騒がないで欲しいと頭を下げた。それが読者の同情を買ひ、マスコミにメールが殺到した。その結果なのか日増しに紙面が小さくなり今では消えていた。それでも常にマスコミの人影を感じる日々が続いていた。そんな中、夢之助は忙しいスケジュールの合間を縫って週に一度は子供たちを連れて杏奈を見舞った。残された時間はいくらも無いか

もしれないが少しでも多くの時間を子供たちの心に杏奈の存在を刻み込ませたいとの思いからだった。

幸いにして義妹の葉奈が子供たちが心配だから同居を始めてくれていた。住み込みの家政婦にも恵まれ、仕事で留守がちな夢之助も安心して仕事ができ、二人には感謝してもきれないほどにありがたかった。

そんな忙しい思いの中でも、暇を見つけてはパソコンを開けた。画面には、いくつものキヤッチコピーとも思える文言が並ぶ。どれも胡散臭い。いくつかは開いてもみたが弱みに付け込んだ治療薬、相談料の名目のばかりではあるが、つい乗ってしまう患者やその家族の思いが夢之助には痛いほど理解できた。

夢之助の事務所や自宅に届く郵便物も杏奈の入院を境に何倍にも増えた。その多くはファンからの励ましの手紙だった。その一つ一つに言葉を添えて返信したいほどにありがたくはあったが、今は杏奈や子供たちのために少しでも多くの時間を割きたいとの思いが勝っていた。夢之助はいくつかのパターンのお礼状にサインをいれた。

家事の一つとして家政婦が手紙の内容に合わせてパターンの中から一つを選び、コピーし投函することで

時間を造りだしていた。

「是非、ご連絡ください。私は青柳家に暖かい笑顔を取戻してさしあげます」

こんな類の手紙も多く届く。決まってそれなりの対価を要求するかのような文面が添えられている。

「まずは信じてください。信じることが希望への一歩です」

強引とも思えるフレーズではあるが囁くように夢之助の心をゆさぶる。相談料の名目の金を振り込んだこともあった。

杏奈の担当医は健康番組にも出てくるほどの屈指の癌治療の権威でもある。二度ほど番組で顔を合わせたこともあり親身になって助言をしてくれていた。

「残念ながらよく耳にしますが有効な……。ここで、今の日本で有効とされている治療の中から患者さんの様態を診ながら最も優れた治療を選択しています」

そして教授は弱みに付け込んだ金目当ての雑音ではないと嘆いた。それ以来、夢之助はその類の封筒は開封することなく段ボールの中へと捨てていた。その中に葛西孝親の手紙もあった。

葛西孝臣には不思議な力があつた。科学では説明できない治療能力の桁外れた力だ。それも自分に対して

ではなく他の人体に対してその能力は発揮されてきた。だが、それを知る人はごく限られた一部の人でしかない。孝親が固く口止めしてきたからだ。

「いいですか、この奇跡は選ばれたあなたの方のために天が授けてくれた物です。決して口外しないように。口外した時点で天の怒りに触れて奇跡は消え去り、再び死の瀬戸際に逆戻りしてしまいます」

患者本人とその家族は孝親の言いつけ通り口外することなく胸の内に秘めた。

万が一にも孝親の持つ不思議な力が公になれば想像もできないほどの騒ぎになるに違いない。マスコミによつて好奇の目にさらされることにもなる。科学の力で解明しようとモルモットにされるかもしれない。金に物を言わすかのように強引な輩さえも付きまどつてくるに違いない。

孝親が自身の不思議な力が付いたのは偶然だった。この冬一番の寒波が日本列島を覆っていた。今にも雪が降ってきそうな低く重たい空。一刻でも早くと近道でもある公園を抜けようとしたときベンチに座る二つの影に足が止まった。大きな影が小さな影を抱き寄せている。どう見ても尋常ではない。

「どうしました？ 大丈夫ですか？」

影の主は、まだ若い母親と六年生ほどの女兒だった。

「ママ、おなかがすいた」

どんなに声を掛けても首を振るばかりだった母親に
女兒がうつろな視線で訴えた。

「さあ、お母さん。ここは寒い。この公園を抜ければ
僕の家です。なにか温かいものでも……。とにかく
躰を温めなければ」

孝親は半ば強引に親子を立ち上がらせ、女兒の手を
引きながら家路へと向かった。

孝親の家は大きくはなくても一軒家だった。少し古
いものではあるが他界した両親が残した家だった。兄
弟のいない孝親はここに独りで住んでいた。

夜も九時近いと家の中は冷え切っている。孝親は家
中の灯りとエアコンをつけて廻り、入り口に近い居間
に二人を通すと温風ヒーターのスイッチを入れて台所
に立った。

「さあ、これを呑んで躰を温めて。今、おうどんでも
つくるから」

孝親は電子レンジで温めた牛乳にたっぷり砂糖を
入れて二人の前に差し出すと女兒の顔に笑みがあふれ
た。

「ママ、とても甘くて温かいよ」

母親も、女兒に促されて温かいマグカップを包み込
むようにして口を付けた。

「麻衣、おいしいね」

「うん、おいしいね、ママ」

無邪気に応える女兒と必死に涙をこらえているかの
ような母親の様子を背中に見ながら孝親は野菜をた
っぷりと乗せた赤味噌仕立ての鍋焼きうどんを一人用
の土鍋に入れて居間へと運んだ。

「さあ、どうぞ。熱いから気を付けてね」

女兒の前にトレーごと置き、お母さんのも持ってき
ますからと台所へと向かった。

「どうしたの？ 温かいうちにたべな」

居間に戻ると女兒は湯気の立つ鍋に箸を付けようと
はしていなかった。それでも母親の鍋が用意されると
女兒の顔がほころんだ。

「おじさん、いただきます」

「えっ、おじさんになっちゃうの？ まっ、いいか。
三十過ぎたらおじさんだよ」

壁の時計は十時を少し回ったところだ。公園で声を
掛けてからすでに一時間ほどが経っている。その間、
この母と子は孝親の前では一言も発してはいない。そ

のまま捨て置くこともできなくなかったが強引なままで家に連れてきた。何がそうさせたのかは孝親にもわからなかったが久しぶりに家の中が明るくなったような思いがしていた。

「お母さんも、どうぞ。躰が温まり、おなか膨れればそれだけで幸せを感じられる。だめだこりゃあ、おじさんのセリフになっている」

そう口にして孝親が大きな声で笑った。釣られて母と子も笑い声をあげる。たとえ一瞬ではあっても忘れていた暖かな空気がこの居間に流れている。エアコンと温風ヒーター。さらに鍋の湯気がその暖かさを増幅させていた。

「お母さんもうどうぞ。結構、自信あるんですよ」

赤味噌仕立ての鍋焼きうどんは孝親の他界した父親の好物であり母親の自慢の料理でもあった。夏でも冬でも十日に一度は食卓が上がった。客が来れば必ずこの鍋焼きうどんでもてなすほどだったこともあり、専用の土鍋が今でも十個ほど台所の棚には残っている。両親が他界してからは孝親がその記憶を追いながらレシピを引き継いでいた。もつとも誰かに食べてもらおうといったこともなく両親の命日には仏壇の前を湯気で曇らしていた。

「おいしいっ。ママーおいしいね」

「そお、初めて他人のために作った。褒めてもらえてうれしいな」

孝親は本当にそう思った。これまでも何度となくこの鍋焼きうどんを作ってきたが誰かに食べてもらうために作るなんてことがあるとは想像をもしていなかった。今、ここに素性も知らない母と子が幸せそうに温かい鍋に箸をつけている。どんな事情があるのか孝親は知らない。聞く必要もない。母親の顔からは暗い公園に漂わせていた深刻さが消えていた。

「おじさんは食べないの？」

二人が食べている様子に見とれている孝親の顔が緩んでいる。不自然な間合いと言えなくもない時間に女兒が反応するかのように口にした。

「勿論、食べるさ。おじさんもお腹がペコペコだから。」

ここで一緒に食べてもいい？」

「うん。とってもおいしいよ」

孝親も女兒にせかされるかのようにテーブルの上に土鍋を置いてふたを上げると大きく湯気が立ちあがり土鍋の中はまだグツグツと音を立てていた。

即席ではあっても家族のようなだんらんを孝親は久しぶりに味わった。女兒も母もたわいもない会話に何

度も笑い声をあげた。

「あれ、おじさん。私たちの他に誰かいるの？ 今、女の人の声が聞こえた」

「そう。実はこの家には女の幽霊が住んでいるんだ」

「やだー」

「うそだよー。お風呂が沸いたよって教えてくれたのさ」

「ほんと？ おじさん家のお風呂はお話ができるの？」

女兒は、母親の方を見ながら信じられないかのようにキョトンとした顔をしている。

「お母さん、もう夜も遅い。まずはお家の人が心配しているといけない。連絡をした方がいい。携帯はお持ちですか？」

「ありがとうございます。私たちは親子二人の生活ですから特に心配してくれる人はいません」

「そうですか。じゃあ、お風呂に入って今夜はここに泊まって明日の朝帰ればいい。そうしてください。今からじゃ・・・家の中も冷えているだろうし子供さんが風邪をひいてもよくない」

「でもそれじゃあ。これ以上ご迷惑をおかけするのも・・・」

母親は心の底から申し訳なさそうな顔をしている。

「ちよつと待つてください。今、母親の筆筒からスエットを出してきます。まだ新しいのがあったはずです」

孝親はこの母と子にどんな事情があるのかは知らない。孝親は、腰を揚げながらこの母と子のために何か力になれないかと思うようになっていた。そうすることが自分自身が救われるかのような思いがわき始めていたのかもしれない。孝親にしてみれば、これまで独りでやってきたものどどこかに寂しさを抱えての生活だった。偶然が引き合せたとはいえ、新しい家族ができた。そんな錯覚に落ちていることを楽しむかのように心が弾んでいる。

孝親は真新しいスエットの上下を二人分抱えて再び居間に入ると二人を強引なまでに風呂場に案内し、その間にテーブルを隅に寄せ、押し入れから布団を出して敷いた。

「おじさん、このパジャマだぶだぶ」

女兒の着ているスエットは孝親の母の物だ。ズボンが手繰り寄せて足が出ているもの、手の先から袖が垂れ下がっている。母親が来ているのは暮れの売り出しで買っておいた孝親のスエットだった。やはりこれも母親が着るには大きい。

「ごめんね。これしかなくて」

「ううんだいじょうぶだよ、おじさん」

「さあ、麻衣はもう寝なさい」

時計の針はすでに十一時を過ぎていた。母に促がされて麻衣は布団の中に入るとすぐに寝息を立てた。

「疲れていたんですね麻衣ちゃん」

女兒の寝顔を遠目に孝親は親しみを込めて口にした。「葛西さん、ご親切をいただき本当に今夜はありがとうございます。申し遅れましたが吉岡真紀子と言います。あの子は麻衣。親子二人の生活です」

居間の隅に動かされたテーブルを挟んで孝親と向かいあった。真紀子が深々と頭を下げると多くを話始めた。

真紀子が言うには、麻衣の父親は病気で二年前に他界したとのことだった。麻衣が小学校に上がって間もなくのことだったらしい。今日は二人だけで三回忌を済ませたもののこれからのことを考えると不安も多く、つい公園のベンチで考え込んでしまったとのことだった。不安の中には経済的なこともあったが真紀子は正社員として町工場の事務員として給与を得ている。それでも、母と子の生活を支えるには乏しく、夫が残してくれた生命保険を切崩しての生活だと口にした。それでも行政の手助けもあり、麻衣が成人するまでぐら

いは何とかなるとのことらしい。真紀子にとって一番の悩みは麻衣が抱える病気だった。生まれながらにして心臓が弱いとのことだ。移植とまではいかないまでも走り回るほどの強さはない。真紀子より長く生きられるとは限らない。不安と経済的な重圧に押しつぶされそうになってふらふらと公園まで歩いてベンチにしがみ込んでしまっていたと口にした。しかし、孝親が声を掛け、温かい鍋焼きを口にして生気に帰ることができたことと涙をこらえることなく、「ありがとうございます」と、感謝を述べた。

「そうですか、いろいろと心配です。これからも私にできることがあればお力にならせてください」

今にして思えば孝親には公園で声を掛けた時から、この母と子に強い力で引き寄せられた不思議な縁があったのかもしれない。

「そうだ、私が麻衣ちゃんにおまじないをかけます」
孝親は麻衣が眠る布団の横に正座をして右手を額のあたりから足元に向けてゆつくりと手のひらをかざすかのように動かした。手のひらが心臓の辺りに来ると麻衣がうめき声を微かに上げた。同時に孝親の躰が焼けるような熱を感じた。

「熱い」

声に出すことなく堪えた。ほんの一時のことではあったが確かに体の中を熱いものが走った。

「気休めかもしれないかもしれませんがと麻衣ちゃんも今より元気になりますよ」

孝親の行為は気休めにしかならない。それでもどこかに自分の持っている力を信じたかった。だからといって、「これで良くなる」では嘘になる。今よりもと付け加えたことで真紀子の背負う重い荷物を少しでも軽くしてやれる。あの熱いものが躰の中を走ったという事実を信じたかった。

「ありがとうございます」

真紀子はなんら根拠は無くても孝親の好意がきつと麻衣も私も元気にしてくれると思えた。

「じゃあ、私はお風呂に入って寝ますからお母さんも今夜はゆっくりとお休みください」

孝親は居間の襖を閉めて風呂へと向かった。

翌朝、孝親は台所から聞こえてくる音で目が覚めた。

「おはようございます」

台所を覗きにきた孝親の足音に真紀子が振り向き、口にした。ガラス越しに差し込む朝の光がもたらす効果だけではない。真紀子の顔が眩しく孝親には見えた。

「おじさん、おはようございます」

真紀子に続いて麻衣も笑顔で孝親に向ける。

「おはようございます」

戸惑いをみせながら孝親が応える。

「ごめんなさいね。勝手に使わせてもらいました」

「おじさん、早くー。顔を洗ってここに座って。この目玉焼きは麻衣がつくつたのよ」

疑似ではあっても何年かぶりに家族の温もりを感じる朝食だった。

台所の後片付けをして真紀子と麻衣が帰った三日後に孝親の携帯が鳴った。

「今夜、伺ってもいいですか？」

真紀子からだった。様子が普通ではなかった。何があったのかとは思ったが何も問い返すことなく七時過ぎには帰っているとだけ応えて携帯を切った。

その日、孝親は残業をすることなく六時に帰宅し玄関先の灯りをつけて真紀子と麻衣が来るのを待った。

「葛西さん。私には何が起きたのかわかりません。麻衣の心臓が治っていると言われました」

玄関先で孝親と顔を合わせるなり真紀子を取り乱しているかのように口を開いた。

先天性の心臓病が治ることはなく特別疾患患者として麻衣は定期的な検査を受けてきた。それなのに今日

の検査で麻衣が産まれた時から担当医としてかかわってきたきた医師が、「何も異常がありません。健康者です。狐につままれたようです」と、目を白黒させて過去のカルテを放心状態で何度も見返していたとのことだった。もつともそれを聞いた真紀子も医師が何を言っているのか理解不能の状態に陥り、傍にいた看護師が二人に声を掛け我に返らせたらしい。

「何が起きたのかは私にもわかりませんがよかったですやないですか。さあ、上がってください。麻衣ちゃんおいしいケーキがあるよ」

真紀子の顔が興奮しているかのように赤く息も荒い。歓びが大き過ぎてどう表現すればよいのかとの戸惑いもあるのだろう。あまりにも不思議過ぎて頭の中も心の中も混乱しているかのように見える。躰中がざわめき、叫び声をあげている。この先において再び病に侵されることはないのか？ この歓びは本物なのか？ そうした何もかもを孝親に払拭して欲しいと訴えているかのように見える。

「ママー、早くケーキをごちそうになろうよ」

真紀子とは違い麻衣は素直に心臓が治癒していることを歓びと共に受け入れているかのように見える。

「おいしい。おじさんありがとう。麻衣ね、お医者さ

んにこれからは体育の授業を見学しなくても参加できるよって」

「そっかー、よかったね」

「うん」

「確かにあの時、強烈に熱い物が一瞬ではあったが躰を通り抜けて行つた。あれは何だったんだろう。子供の時にもあったような気がする」

孝親はケーキを口にしながら声に出すことなくつぶやいた。

小学三年生の秋。校庭の紅葉が赤くなりかけていたような気がする。校舎の裏庭で飼っていたウサギが野良犬に襲われ死にかけていた。そのとき、同級生数人と手をかざし、「神様たすけて」と祈ったことがあった。不思議なことに一瞬にしてウサギは元気に巢へと駆けて行つた。たしかにあの時も熱い物が躰を走つたような記憶がある。

「葛西さん、葛西さんが麻衣の躰を治してくださいましたんですよね」

孝親の目が遠い過去に思いを馳せているかのようにうつろに泳いでいる。そんな視線を引き寄せるかのようにならぬように真紀子は問いかけた。

「いえ、私は何も・・・。ただ麻衣ちゃんの病気がよ

くなればとの思いで念を送っただけです。二、三日前の晩にテレビで見た特番で取り上げられていたシャーマンのまねを・・・」

「シャーマン？」

「そう、シャーマン。日本の下北半島のいたこと同じ」
孝親の言葉に嘘はない。昨夜のことは本当にテレビで観たシャーマンのまねをしただけだった。麻衣が完治したことは偶然にしか過ぎないと力を込めた。その時だった。

「今日の東京高裁で行われた裁判中に興奮した被告が心臓発作で倒れ、病院に搬送されましたが先ほど亡くなりました」

テレビから流れるアナウンサーの声に孝親の顔から血の気が引いた。瞬きすることを忘れたかのように視線が釘付けになり耳がそばだっている。幼児虐待で世間を騒がした無職の男が公判中興奮して喚きちらしたあげく心臓発作で死んだらしい。

子供達の女の所に転がり込んだあげく、幼い二人の子供に虐待を繰り返して死なせた上に、泣き声がうるさいと生まれたばかりの自分の血を引いた赤子を激しく揺さぶり死なせた。しかも公判では「あやしていただけだ」、「しつけをしていただけだ」と言い張る。反省

の色がみられないと検事がたしなめたとたん被告が興奮して暴れだしたらしい。

麻衣の身に念を込めた時にこの男のことが孝親の頭の中をよぎった。麻衣の代わりにお前が死ねと思ったわけではない。がしかし、人の痛みを知るには自ら痛みを持つしかない。麻衣の痛みはお前が負え。神がいるならば・・・。それではだめですか神様。と念じたのも事実だった。

今にして思えば、子供の頃のウサギの時もそうだった。数日して、校舎の裏で怪我をした野良犬が死んでいるのが発見された。あの時も微かではあるが孝親は犬のことが頭をよぎったような記憶がある。

麻衣が元気になり一年ほどして真紀子と麻衣の姓が葛西と変わった。その間に孝親は自分が持っている力が本物であるか否かを確かめずにはいられず、二度ではあるが重篤な疾患を持つ子供に手をかざした。癌に侵され余命が告げられていた男児と、腎臓に障害を持つ女児だった。再び奇跡が起きた。いずれも担当医が首をかしげることしかできないほどの健常児童に変化した。本来ならばニュースとして取り上げられ大騒ぎになるほどの出来事だった。が、孝親は事前にそうな

ることを恐れ、北海道と長崎の総合病院の小児科病棟に見舞客を装って病室に入った。そして、親のいない隙を狙って手をかざした。手をかざす行為そのものはいいのだが、孝親を悩ましたのは重篤な病を誰に転化させればいいのかだった。誰であろうと命を縮めることにもつながりかねないことを神でもない孝親が行ってよいはずはない。孝親が選り出した患者、その病の転化先として選りだされた人間。そのどちらかに誤りがあれば神が裁きを下すに違いない。奇跡は起こらないであろう。いや、奇跡の転化先として孝親自身が神によって選ばれることになっても後悔はない。これが孝親の行きついた先の答えだった。孝親が選んだのは心神喪失とはいえ賑やかな交差点で刃物を振り回し子供を含め五人をも殺傷させた男と、身代金目的の誘拐を繰り返し三人の幼児を埋めた男を選んだ。いずれも容疑を認め留置されてはいたが、死刑の判決が下りるのであろうと報道されていた。

二人の幼児に奇跡は起きた。ドア越しに中の様子を見るとうかがっていた孝親の耳に、幼児の胸にボタンの跡のような軽いやけどが診られると医師の声が聞こえた。「一瞬ではあっても患部が焼ける熱がパジャマのボタンに移るのかもしれない」

孝親は小さくつぶやきその場を立ち去った。

想像した通り病院の中では、「考えられないことが起きた」と、医師や看護師の間で騒ぎにはなったが大きく拡散することはなかった。

この出来事を機に孝親は自身の不思議な力を役立てたいと考えるようになった。だからといって公になることだけは避けたかった。騒がれば自分の居場所がなくなるような気がしていた。私にも、我が子にもと押し寄せられれば逃げ回らなければならない。神でもないのに転化させる相手を選ばなければならない。助かる患者が味わう飲みと同じ量。いや、それ以上かもしれない罪悪感に押しつぶされまいと悩むことにもなる。結果として力を発揮する相手は慎重に選んだ。特に基準を設けたわけではないが孝親の心を大きく揺さぶる患者を選ぶことにした。地域に偏ることなく大きく間を空け患者自身が眠りにについている時に手をかざし、家族には固く口止めをした。報酬は何ら要求することなく、患者の家族が得られた飲みに値するだけのものを施設などに寄付すればよいと告げていた。

夢之助とその家族のことについてはテレビのニュースで知った。モザイクは掛けられているものの小さな子供が母の病を気遣っている。人気商売とはいえこ

んな小さな子供までもがマスコミの力によって見世物
と化されてしまう。

傍若無人に走り回るブルトリーザーかとさえ思えるマ
スコミ。相手を気遣うことなく洗いざらいを掘り起し、
甘味なニュースとして大衆に提供することで販売部数
という成果だけを手にしたいと夢之助の周りを追いか
けまわす。

青柳夢之助と仲屋善次郎は子供の頃からの親友だっ
た。共に小屋を構える座長である父親から役者として
鍛えられ、今では芸能事務所社長を兼ねながらお互
いに良きライバルとしてしのぎを削っている。

青柳一座と仲屋一座には旅行会社のツアーが組まれ
るほどの人気があった。もつとも夢之助も善次郎も小
屋での出演は一週間ほど行われる春・秋公演と正月公
演の三度のみであり活躍の多くは映画であったりテレ
ビだった。普段の小屋は共に弟が座長頭を務め、いつ
も客席をにぎわしていた。

常に週刊誌に追いかけれながらも浮名を流してい
た夢之助も三十歳になると同時に杏奈と出会い家庭
を持った。翌年には長男、甚之助が産まれ、一年空け
て彩奈が産まれた。いずれの時もマスコミが押し寄せ

笑顔があふれかえる家族の様子が全国に報じられた。

杏奈の病は甚之助が年長に上がるうという時に発症
した。おしどり夫婦とその家族。夢之助が舞台上に上
る時には必ず杏奈がその世話をし、いずれは後を継ぐ
甚之助にもその姿を見せた。そして、必ずマスコミが
それを取材するのがおきまりだった。舞台公演はそれ
ほどに話題性の高いできごとなのだ。

杏奈の姿が消えた。マスコミが騒ぎだし、杏奈の病
状が世間に知れるのにそれほどの時間には必要としな
かった。夢之助と共にいたいけな子供たちの姿がマス
コミの力によっていたるところにあふれた。必要に追
いかまわすマスコミは病院にも幼稚園にも現れ、格好
の獲物でも見つけたかのように追いかけまわし、連日
のように垂れ流された。たまりかねた夢之助は記者会
見を開きカメラを見据えた。

「杏奈は病氣と必死に戦っている。同じように幼い子
供たちも母親が傍にいない寂しさと必死に戦っていま
す。どうか今の状況を察してほしい」

夢之助の顔が微かにこわばっている。奥歯を噛みし
めているのかえらが張りだしびくびくと動く。常に男
を演じる夢之助には弱さを見せるわけにはいかない。
いつの時でも人前で涙なんぞ見せることは許されない。

記者会見の様子がワイドショーで放映されると同時に夢之助とその家族を励ます手紙が殺到した。と、同時にマスコミを批判する嵐が吹き荒れた。依頼、マスコミに追っかけまわされることもなくなった。

この一連の騒動は孝親の食卓にも上がった。

「甚之助くんも杏里ちゃんもかわいそう。まだちっちゃいののに。私の時のように奇跡が起こるといいのね、パパ」

麻衣の言葉に孝親は思わず真紀子の顔を見た。孝親の持つ力を真紀子は知らない。いや、麻衣に奇跡を起こしたのは孝親だと真紀子は信じている。麻衣の躰に手をかざしたあの時に奇跡が起きたのだと。だが孝親はテレビで観たシャーマンのまねをしたただだと笑った。

「パパ、今度のお休みに東京に出かけたら」

麻衣が寝静まり、キッチンテーブルを挟んでコーヒーを点てながら真紀子が孝親に微笑んだ。この微笑みが何を言わんとしているのかは孝親には容易に察しがついた。北海道の時も九州の時も、いやそれ以外の時も真紀子には仕事だと告げて出かけていた。結婚する前はともかく一つ屋根の下で共に暮らすようになってから真紀子がそれを信じていたかは孝親にはわから

ない。孝親も真紀子も何らその素振りは見せないようにしてきた。でも真紀子はうすうす気が付いていたのかもしれない。だから孝親に東京行を勧めているかのよう

に孝親は感じた。
孝親の行うことは大きな富をもたらすことになる行為ではあっても何らの見返りも要求したことはない。それどころか、身元が知られないようにさえしてきた。患者の家族にとってはただただすがる思い。何も見通せない暗闇に一筋の光を見つけた思い。あるはずのない光ではあってもあると思いたい。そんな思いが孝親の申し出を受け入れ、何ら疑うことを放棄していた。孝親の清廉な容姿がそれを手助けしていたのかもしれない。

孝親は東京に向く前にシャーマンについて夢之助に手紙を書いた。そしてその力が私にはあると。家族に元の生活を取り戻してあげたいと。ただし、私の身を明かすことはできないので「ツイッターにスカイツリーから富士山を見た」と、書き込んで欲しいと付け加えた。しかし、何ら返答はなかった。

「仲村善次郎に会って話してみたら」

真紀子がさりげなく孝親に語りかけた。真紀子言うには善次郎は夢之助の無二の親友だから善次郎から

夢之助に働きかけてもらえばとさりげなく口にした。

夢之助は有名人であるがゆえに励ましの声も多い反面、雑音ともいえる声も多いはずである。中にはあからさまに金銭目当ての物もあるに違いない。そんな夢之助に孝親の申し入れを信じると言う方が無理なことなのかもしれない。当然ガードも固くなっているだろう。その固い扉を善次郎なら開けられるかもしれないと真紀子が言うのだ。

湯気の向こうの真紀子の顔が微笑んでいる。独り暮らしの長かった孝親とあの薄暗い公園で出会った真紀子と麻衣が今では一つ屋根の下で暮らしを共にしている。あれ以来孝親は真紀子と麻衣の微笑む姿に多くの安らぎを受けてきた。世間的には小さな温もりであっても真紀子と麻衣も孝親と共に暮らすことで何物にも代えがたい歓びを得ていた。この小さな家庭を有名人と関わることで世間の注目を浴びることにつながるかもしれない。シャーマンの存在という事実だけでもマスコミの餌食となりえる。さらには、奇跡の回復と持ち上げられる患者の身代わりとして転化させられた人間の存在が表に出れば、「お前は神か。どんな人間にも尊厳がある」と、ののしられることになる。孝親にとっては何としてでも隠しきらねばならない中での

かざしだった。

東京行きは快速に差し込む朝の陽ざしが眩しい。座席に背中をあずけながら孝親は思案にあぐねた。夢之助に会うのが難しいから善次郎にというのも安易すぎることはわかっていた。共に名の通った大物俳優である。一般人が事務所を訪れても居留守をつかわれるのがおちである。それでも夢之助の子供たちのためにも何とか奇跡を呼び込んでやりたい。孝親は真紀子が善次郎と口にした晩から徹底的に善次郎のスケジュールはパソコンを叩くことで調べ上げた。

面白いことがわかった。善次郎の右足首が捻挫で思うにならないらしい。それも尋常の捻挫ではないらしい。撮影中に段差を踏み外し骨折しなかったのが不思議なくらいだとの医師の診たてとある。骨折の方が完治は早いのだがと医師の発言もある。善次郎の右足首は石膏で固められている。今日で一週間になる。午後からはテレビの収録が予定されているらしい。善次郎ならば無様な格好でカメラの前に立つことは避けたいはずだ。孝親は朝から病院の待合室で善次郎を待った。受付が始まって一時間ほどしたところで黒のジャガーが停まったのがガラス越しに見えた。マネージャーらしき男に付き添われてサングラスに大きめのマスクを

した善次郎が車から降りドアを閉め、用心深く慎重に最初の一步を踏み出した。善次郎が車から離れたのを確認すると、付き人の男はジャガーを駐車場に向けてハンドルを切った。自動扉が開き松葉杖の善次郎が入り口に一番近い椅子に腰を下ろした。歩くのも辛いのが顔が苦痛にゆがんでいるのがマスクに隠れていても容易に察しが付く。マネージャーが受付へと向かった。

「今しかない」

孝親は、小さな叫び声と同時に駆け寄るかのように善之助の元へと移動し、腰を落として左足の膝の上に避難している石膏で固められた右足首に手をかざした。

「何なんだ、この男は？」

サングラスに透ける善次郎の目が口になっているのが孝親には聞こえた。

「熱っ」

善次郎の足が動きかけた。

「動かさないでー」

押し殺した孝親の言葉ではあっても威圧に満ちている。

「・・・」

善次郎は黙るしかなかった。いや、抵抗したくても足の痛みがそれを押しとどめていた。

一分にも満たない出来事ではあったが手をかざすことができた。

「何かあったのですか？ この人は？」

受付から戻ったマネージャーが不審そうに孝親を見下ろしている。その顔には腕力に訴えてでも善次郎を守ってみせるとばかりに顔をこわばらせていた。

「いや、なんでもない。知り合いなんだ」

善次郎は平然を装って、今にも孝親に襲い掛からんとしているかのようなマネージャーを制した。

「善次郎さん、足の痛みは？」

立ち上がった善次郎の姿は両足を床に付けている。それも松葉杖を使うこともなく。マネージャーの目は、あつげにとられたかのように大きく見開き、口があいたまま次の動作を忘れていくかのようだ。

「えっ」

マネージャーに言われて初めて善次郎が自分の右足を見下ろし二度、三度と床にかかとを打ち付ける。微かな音を耳で確認すると今度は足踏みを繰り返した。石膏の厚みが右足をわずかに長くしていることもありぎこちないものではあった。が、何ら痛みを感じることもなく善次郎の顔は子供のようにはしゃいで見せた。「嘘だろう？ 信じられん。何が・・・どうして・・・」

歎びであふれる善次郎の手を引いて孝親は数メートル移動した。小声ならマネージャーに声が届かぬ距離になる。口の開きも周りの誰にもさとられぬように少しうつぶき加減で善次郎の耳に訴えた。

「いいですか、今ここで起きたことは誰にも言わないように。マネージャーにも医師にもです。絶対にです。もしこのことが漏れれば、もつと激しい痛みに一生悩まされることとなりますよ。これは脅しではありません。診察を終えたらもう一度ここでお会いしましょう。待っています」

ピクリともしない眉。瞬きさえもない。夢之助の家族をなんとかして救ってやりたい。孝親の行為が世間に知られることとなれば大騒ぎになりかねない。真紀子や麻衣をも巻き込むことになる。かつて麻衣が患っていた心臓病が快気したこと不思議さも合わせてマスコミは掻き立てるに違いない。何としてでも秘密裏に事を進めたい。孝親の顔は真剣そのものだった。

「わかった。直ぐに戻るからここで待っていてくれ」
マネージャーに医師が待っているからと急かされ孝親の方に振り向きながら診察室の中へと入って行った。「どうですか足の痛みは？」

医師は善次郎が仕事のためにギブスを取りたがって

いることに懸念をしめすかのように口にした。

「先生、もう痛みもありません。石膏を取れば足首は自由に動かせると思います」

「本当ですか？ 今、無理をすると取り返しのかないことになり・・・」

懐疑的な医師の言葉を遮るかのように善次郎は立ち上がりステップを踏んだ。どうだと言わんばかりに小躍りする善次郎に医師の顔は驚きに満ちている。

「そんなばかな。なぜ？ 驚異的な回復力だ」

長年医師として多くの患者を相手にしてきた。患者の様態から完治までに踏まなければならない手順と必要な日数ぐらいは容易に見当が着く。少なくとも善次郎のギブスを取り外す時期ではない。今しばらくこのままだと説得するつもりで診察だった。前もってマネージャーにもそう伝えていた。目の前にいる善次郎の足は、完治していると床を打つ音がそう告げている。

診察室から足取りも軽く善次郎が顔を見せるやいなや孝親を探すかのように広い待合室に視線を泳がす。「いやーすごい。医師もマネージャーも目を白黒させていたよ。なあ、どうなっているんだ。おれにもわかるように教えてくれ」

小さな子供がとっておきのおもちゃをショーウイン

ドウの向こうに見つけたかのように大きな目を丸くし輝かせる善次郎。今なら善次郎は孝親が何かを要求すれば二つ返事で応えるだろう。これで夢之助に会う道筋はできた。

「善次郎さん少しだけ時間をください」

「ああ、分かった。ちよつと待ってください。マネージャーに告げてくるから」

善次郎は孝親に病院の向かい側にある喫茶店で待つていて欲しいと口にし、会計窓口で支払をしているマネージャーの元へと向かった。

「申し訳ない。お待たせしました」

大物といわれる俳優の善次郎ではあったが孝親に敬意を払うかのように丁寧な口調になっている。

「おかげをもつて、足は何でもなく元の通り。これで無様な格好をカメラの前にさらけ出すことなく録画取りができます」

善次郎は注文取にきたウエイトレスが背を向けるやいなや欲びを言葉に変えた。

「そうですか。それはよかったです。私もうれしいです。あのうー、実は折り入ってお願ひがあるのですが……」

孝親は遠慮がちに切り出した。

「なんだ、金か？ 十万、二十万、いや五十でも百で

も構わない」

善次郎の心がささやく。しかしそれを口にすることは目の前に居る恩人に対して失礼極まりない。次の言葉を待つしかなかった。

「実はすぐにも夢之助さんの奥様にお会いしたいのです。小さなお子様のためにも手助けをさせていたただきたいと東京にやってきました」

無言の善次郎の前に孝親は話を続けた。

「杏奈さんに。杏奈さんの病気もあなたは治せるのですか？ それも一瞬で」

孝親は子供たちのいたいけな様子をテレビで観て何とかしてやりたいと手紙を書いたがスルーされた。

だからといってそのまま見捨てることもできず親友といわれる善次郎に近づいたと正直に告げた。

善次郎には孝親からの申し出が意外だった。てっきり金を要求してくるものとばかり思っていた。孝親の持つ不思議な力はそれほど価値がある。今目の前に居るこの男が口にするならば杏奈の病魔は消え去り、夢之助の家族に再び平穏を取り戻すことができる。この男を信じるしかない。

「わかった。今、電話する。今夜にでも夢の助の自宅で。遅くなりますがいいですか？」

「かまいません」

善次郎は孝親が頷くとすぐさま夢之助に電話を入れた。

「いいから、俺の言うことに従え。いいな、今夜だ。十一時ごろ行くから。杏奈さんを自宅に。絶対だぞ、いいな」

強引ともいえるやり取りではあったが確約は取れたという安堵の色合いを善次郎が漂わせた。

「大丈夫そうですね？」

「ああ、バッチリ」

親指を立ててにっこりと笑みを見せて善次郎はコーヒーを口にした。どこか高揚している自分を落ち着かせようとしているようにも見えなくはない。

「目の前にいるこの男がおれの足を直し、麻衣さんの病気も直すという。見ず知らずの男が・・・この男の持つ不思議な力は何なのだ。目的は何だ、金か？ 夢之助なら麻衣さんが完治するなら何千万であっても首を縦に振るだろう・・・いや、今は素直にありがとうとだけ思わなければ・・・」

善次郎の心の内は、初対面の名も知らない孝親に対する懐疑心を打ち払うかのようにぎわめいている。

「申し遅れました。わたしは孝親といいます。勝手な

お願いをしておいてなんですが今日のことは誰にも知られたくないのです。私のことも含めてです。素性は明かせませんが信じていただくしかありません」

「わかりました。何も伺いません。孝親さんの持っている力は私の足が証明できます。それでお礼はどうさせていただけば」

「見返りは何もいりません。このことは絶対に公表はしない。誰にも。家族にもです。それだけお約束していただければ何もいりません」

「何もですか？」

善次郎は念をおした。

「これほどに価値のある力をただ善意だけで行っているのか。しかも交通費を掛けてまで」

善次郎には信じられなかった。有名人というだけで多くの人間が金目当てに集まってくる。いやな思いを何度としてきた。この男の力を持ってすればいくらでも金になる。いや、この男の存在そのものが知ればわけのわからぬ輩やうばいに家族さえもみくちやにされることは容易に想像できる。素性も明かさず信じると口にする孝親を善次郎は胸襟の面持ちで呑み明かしたいとさえ思った。

「はい。何もいりません。ただ、何度も言いますが絶

対にこのことが知れることのないようにだけは約束ください」

孝親は、これが最後とばかりに念を押した。

「さあ、孝親さん入ってください」

善次郎は家の角に潜むかのように立っている孝親を夢之助の大きな屋敷の玄関の中へと招き入れた。

「善次郎、この方は？」

「夢之助、何も聞くな。黙ってこの人を信じろ。おれが保証する。おれの右足がその確かさを」

善次郎は右足のかかとを何度も上り框に打ち付け完治したことを夢之助にアピールした。

「善次郎、昨日まであんなに痛がっていたのに・・・まあいい、上がれ」

何をどうしようというのか夢之助には全く理解できなかった。しかし善次郎に「おれを信じろ」といわれれば黙って信じるしかない。昔から二人は無茶なことをしてきた。おとがめなしの処分保留とはいえ二人して所轄の留置所に留め置かれたこともある。無二の親友が夜中に見知らぬ男を連れてきても黙って招き入れるしかない。

「奥様は今どうしておられますか？」

応接室に通された孝親は腰をソファーに下ろすなり口を開いた。一刻も早く手をかざしたい。元の躰に杏奈を戻し、この家から立ち去りたいと孝親は思っていた。

「杏奈は今、寝室で横になっています」

「そうですか。他にどなたかは・・・？」

「いや、誰も。義妹も家政婦も今夜はいない。二人の子供はもう寝きつている」

夢之助は善次郎の指示とおりに義妹と家政婦には家族四人になりたいと言って今夜は遠慮してもらったと付け加えた。

「わかりました。それでは奥様には素肌で寝間着だけを羽織っていただいでベッドに仰向けで横になってもらってください。用意ができましたらお声を掛けてください」

「善次郎——」

「いいから黙ってこの人の言う通りにしろ。ここで待っているから。早くしろ」

夢之助の顔は不安に満ちていた。ただ黙って従えと言われればそうはするもののこれから何が起きるのか想像さえもつかない。善次郎の足をこの男が治した。

だからといって杏奈の病気を・・・。医師からは余命

さえも宣告された杏奈を救ってくれるというのかこの男は。

「妻に何か前もって知らせることは？」

「何もありません。直ぐに終わりますから」

「わかりました」

夢之助は覚悟を決めた。寂しさに耐えて笑顔さえ忘れかけている幼い二人の子供たちのためにもこの男を信じるしかない。

程なくして夢之助が応接室に戻ってきた。孝親は善次郎を残し、夢之助と杏奈が横たわる寝室へと向かった。

「奥様、そのままじっとして動かないでください。一瞬ではありますが焼けるような熱さを感じるかもしれませんが驚かないでください。直ぐに終わりますから。それでは軽く目を閉じてください」

孝親は心配そうに見守る夢之助に寝室の照明を少し落とすように告げ、早々に掛け布団の上から胸のあたりに手をかざし念を込めた。

「うっー」

患部が焼けたのか杏奈が一瞬ではあったが顔をゆがめうめき声をあげた。見守っていた夢之助の躰が動きかけた。が、この男を信じると決めたもう一人の夢之

助が動きを制した。孝親の手は杏奈の躰のいたるところをかざし動いた。病魔はすでにいたるところに転移しているのか手が動いたたびに杏奈のうめき声が寝室に散った。

「ふう・・・」

孝親がかざしを終え大きく深呼吸をすると力を込めて熱さに耐えた杏奈と同じ量の力を込めて見入っていた夢之助も続いて大きな呼吸音を吐いた。

「夢の助さん、奥様。明日、病院に戻れたら医師の検査を受けてください。これまでのことが夢だったのかと思うほどに病魔は消え去っているはずです。医師は信じられないとばかりに色々と言問をしてくるでしょう。検査に間違いがあったのかと手を替えては何度も同じ検査をしてくるかもしれません。それでも今日のことは絶対に口外しないでください。誰にも。たとえ親族であってもです。あなた方ご夫婦は世間が注目しています。もし事が公になれば日本中が大騒ぎになります。万が一にでも事が知れるようなことになれば奥様の躰は再び病に侵されることになります。いいですわね」

孝親は諭すようにゆっくりと夢之助と杏奈に言い聞かせ寝室を出て善次郎の待つ応接室へと戻った。

「孝親さん・・・」

善次郎の顔は不安がみなぎっていた。重症とはいえ足の捻挫と余命を宣告された病魔とはあまりにも大きな差がある。うまくいったのだろうかという思いを乗せて口からでた。

「大丈夫です。病魔を追い払いました」

「そうですか。ありがとうございます」

善次郎の顔が喜びで満ち溢れていた。まるで自分の事のように感謝の言葉が応接室を跳ね回っている。

ほどなくして、着替えを済ませた杏奈を連れて夢之助が応接室に入ってきた。

「まあ、あなた。お茶も出さないで。お客様に失礼ですよ」

信じられないほどの血色のよい顔つきの杏奈の笑顔に善次郎は驚いた。

「いや、お茶なんかよりブランデーの方が。その方がいいよな、善次郎？」

病魔が一瞬にして退治されたことは杏奈の血色を見れば一目瞭然でわかる。体力もなく常に誰かに支えられながらしか歩行できなかった杏奈の足取り。それでは、軽やかに踊りださんばかりの回復ぶりを見せている。そんな杏奈を目の当たりにしては祝い酒をし

ないわけにはいかない。童心に帰ったかのようなはしやぎぶりの夢之助と杏奈。

人は時として飲びを分かち合いたいと心が躍る。嬉しさのあまり口を軽やかにもする。夢之助の浮かれようは尋常ではない。孝親は制するかのようになり、もう一度口にしないわけにはいかなかった。

「夢之助さんも杏奈さんも善次郎さんもいいですね。今日のこととは絶対に口外しないでください。しらを切りとおしてくださいね・・・。じゃあ私はこれで帰りますので」

「ちよつと待ってください。このままお帰しするわけには・・・」

腰を上げた孝親を夢之助は引き戻すかのように行く手をふさぎソファーに再び座らせた。

「いいんだ、夢之助。孝親さんは俺たちに何も見返りを求めるようなことはしない」

「何を言っているんだ。この人は杏奈の命の恩人だぞ。いや、俺たち家族のだ。このまま何もなかったことのように帰っていただくなんてできるはずないだろう」

夢之助の言葉には力がこもっていた。数か月先に訪れるはずだった悲しみの不安は目の前にいる男によって一掃された。夢之助の家族にとってこれ以上の幸

せはない。何物にも代えがたい恩人に「ありがとう」の一言だけでいいはずはないとの思いを込めた。

「いいから、今夜は黙って二人だけの静かな夜を過ごせ。二人だけで生還した歓びを味わえればいい。俺はそのまま孝親さんを東京駅まで送る。今なら終電に乗れる。明日の朝、またくる」

善次郎は孝親を助手席に乗せ東京駅へと向かった。

「孝親さん、本当にありがとうございます。夢之助は心の底から孝親さんに感謝しています。やつは義理堅い男です。受けた恩に対し何もお返しできないなんてそれはそれで奴は苦しむことになりませう。わかっていただけでしょうが？」

「・・・」

善次郎の思いが理解できないわけではない。しかし、善次郎の右足の痛み、杏奈の病魔の回復の奇跡の裏にはそれらを転化させられた者の存在がある。しかしその事実は誰も知らない。知れば苦しむことになる。その苦しみは孝親独りで背負いきるしかないと覚悟を決めてのかざしである。転化のことを考えれば代償を得ることなど孝親にはできるはずもなかった。

「善次郎さん、それではこういうことでどうでしょう。日本全国には恵まれない子供たちの施設が多くありま

す。そうしたところに少しでも手を差し伸べていただくということ・・・」

「わかりました。私もそうですが夢之助にはそのように伝えます。―そ・・・」

善次郎は、「それと、連絡先を教えて欲しい」と続けたかったが呑み込んだ。それを口にしたところで孝親が応えるはずもないことはわかってきている。

善次郎は心の中で何度も何度も感謝の意を繰り返して孝親が駅舎の中へと消えて行く後姿を見送った。

孝親が杏奈に手をかざした三日後に、夢之助が歓びの会を開いたとワイドショーがこぞって伝えた。

「甚之助くん、よかったね。ママが元気になって帰ってきたね」

女のレポーターが幼い甚之助にマイクを向けた。

「うん。今度、パパとママと杏里と四人でスカイツリーが一番高いところから富士山をみるんだ」

「そう、スカイツリーに」

「そうだよ。みんなで富士山にありがとうっていうんだ」